

令和3年度 臨床研究テーマ成果報告書

診療科（部）名：口腔補綴科

第3期中期目標・中期計画期間中の臨床研究テーマについて該当するものにチェックを入れてください。（塗りつぶし可）

- 1. 口腔領域における新規組織再生・再建法の開発
- 2. 高齢者の特性に配慮した口腔疾患の予防法・診断法・治療法の開発
- 3. 顎口腔機能の維持増進に関する研究
- 4. 歯科医学臨床教育の質保証に関する研究
- 5. その他

研究期間：西暦 2018年 1月 30日 ～ 2022年 3月 31日

研究課題名：顎関節症における疼痛の中枢性感作による過敏化発症の実態調査ならびに中枢性感作が治療成績に及ぼす影響

研究課題の概要及び成果：

現在、顎関節症患者に対する標準治療として、開口訓練や認知行動療法などの非観血的な治療法が推奨されているが、治療に対して反応しない予後の不良な症例も存在する。

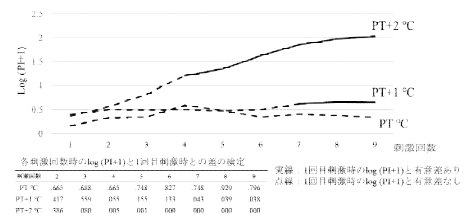
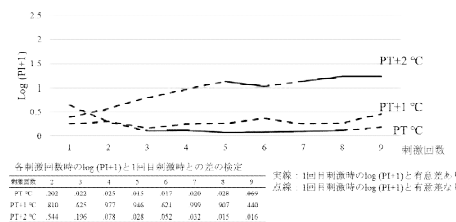
このような難治性顎関節症の原因の一つとして、慢性咀嚼筋痛による末梢性あるいは中枢性過敏化が考えられている。中枢性感作を直接評価することは不可能であり確定的な診断は難しいが、非疼痛群と有痛性顎関節症群で TSSP 発現様相を比較することで、中枢性感作の評価に有用な dynamic QST 刺激強度を検討した。

その結果、中枢性感作を調べるためには刺激強度を患者固有の疼痛強度刺激強度とすることが有用であると推測された。非疼痛群は、繰り返し刺激により3回目から8回目の刺激回数で主観的疼痛強度は有意に減少し、temporal summation of second pain（以下、TSSP）の発現率は0%であった。

一方、有痛性顎関節症群は、10%の被験者に TSSP を認めたことから、疼痛関連顎関節症または顎関節症による頭痛の一部で中枢性感作が生じている可能性が示された。

上記概要・成果に関連する図表等

各刺激強度の繰り返し刺激による主観的疼痛強度への経時的影響（左：非疼痛群，右：有痛性顎関節症群）



当該臨床研究が「口の難病プロジェクト」に関連しているか否か下記のBOXのいずれかにチェックを付してください。（塗りつぶし可）

- 関連がある
- 関連はない